会　議　録

会議の名称	令和３年度第４回富士見市社会教育委員会議
開 催 日 時	令和３年１１月２２日（月）午後７時００分～８時００分
開 催 場 所	中央図書館　視聴覚ホール
出　席　者	古澤立巳議長、佐々木眞理子副議長、荒川照子委員、 京谷恵子委員、吉田徹子委員、蘇武伸吾委員、渡邉知広委員、 吉田和江委員、内海幸一郎委員、冨士伸委員、事務局
欠　席　者	なし
公開・非公開	公開（傍聴人　０人）
会 議 次 第	１　議長あいさつ ２　協議事項　第３３期のテーマについて ３　その他
会 議 資 料	・定期刊行物
会議録確認	古澤立巳議長

会議内容
１．議長あいさつ 【議　長】　１１月１９日に開催された入間地区社会教育協議会社会教育委員部会に出席した。そこで１０月１８日に坂戸市立入西地域交流センターで開催された、入間地区市町社会教育委員研修会の報告書を確認した。事務局を通して各委員にも配布されると思う。研修会のテーマが「コロナ禍における社会教育活動～“できない”ではなくできること～」というものだった。来年の２月には入間地区の生涯学習フォーラムが開催される予定である。フォーラムのテーマは「コロナとの戦い」を予定しているとのこと。 ２．協議事項　第３３期のテーマについて 【議　長】　前回の会議で出た意見を踏まえて、事務局の方に資料を作成してもらった。この資料について、事務局より説明を。 【事務局】　まず、テーマの確認を行う。前回会議での各委員の意見を踏まえ、「４０代から５０代を中心とした地域におけるつながりづくり」と設定した。このテーマについて意見はあるか。 【委　員】　４０代から５０代と一概に言っても、小中学生の保護者で子育て全盛期の方、高校生大学生の保護者で子育ても落ち着き仕事中心の方など、幅広い。この幅広い人たちについて提言書としてまとめようとするのは難しいのではないか。細かく年代を絞って、各年代について提言していくのか。どのような世代を想定して提言書としてまとめていくのか、委員間で想定世代を一致させておく必要があるのではないか。 【委　員】　４０代から５０代と一つに括るのは私も難しいと考える。状況も違えば抱える課題も異なってくるはず。年代で区切るのであれば、どちらかに焦点を当てる必要はあると思う。また、前回までの会議で、４０代５０代を中心に考えるのではなく、希薄化した関係性を如何に築いていくか、次なる担い手として引き込んでいくか、ということに焦点化されたと思う。「中心とした」とテーマ設定すると、前回までの会議と趣旨が外れてしまうのではないか。 【議　長】　テーマとして設定するための適切な表現がまだ思い浮かばないが、特定の世代に焦点を当てるのではなく、世代と世代とをどのようにつなげていくか、ということが社会教育において重要なのではないかと思う。なおテーマ案の「４０代～５０代を中心とした」という文言は、事務局との事前打ち合わせでも頭を悩ませた部分。委員からご指摘があったとおり、対象としたいのは４０代５０代だけではないし、また４０代と５０代では状況等は大きく異なる。文言には対象年代を入れないほうがいいかもしれない。 【委　員】　焦点を当てる、ということについては異論ないが、つながりづくりという中でも、特定の世代を核として据える、というのは違うように考える。

【委　員】　私は５０代であるが、私の周りにいる同世代の方たちは、子どもが小学生のころから様々な活動に携わり、子どもが卒業し、手がかからなくなった今は町会の活動にも携わり、といろいろやっている。しかしその活動を次の世代に引き継ごうとした時に担い手が見つからなかった。私個人の感覚であるが、私は先輩達に言われたときに、では次は自分の番、恩返しをしよう、という考えになったが、次の世代の人たちには「忙しくてできない」と断られてしまった。今はお母さんたちも働いている方が多く、今までのようなやり方では継続できない。そこを変えていく必要があるのではないか。次の担い手として若い世代を巻き込んでいくためには、働いていても参加できるような方法を考えていく必要があると考える。忙しくても、全く興味がないわけではないということが、このコロナ禍で分かった。ボランティアなどの活動がすべてなくなってしまったが、子育てに真剣なお母さんたちは子どもたちと遊んだり、向き合う時間をとろうとしたりしている。今の若い人たちが参加できる形、方法があるのではないだろうか。「４０代から５０代」と言うよりも、３０代くらいから併せて、地域の活動に携われるような方法を考えていくのがよいのではないかと思う。

【委　員】　私は子ども大学☆ふじみの立ち上げ当初から実行委員として携わってきた。設立当初は各団体から実行委員が選出されていたが、今はちがう。今は子ども大学に参加した子どもの保護者が、面白そうだからと言って実行委員として参加してくれている。小学４年生から６年生の子どもたちの保護者なので若い人たちが多い。とても楽しそうに、たくさんのアイディアを出してくれている。活動場所や活動時間を工夫すれば、若い世代の人たちも楽しく活動に参加できるのではないだろうか。

【委　員】　「４０代から５０代」と括っているが、そうではなく「子育て世代」などとすることはできないか。

【事務局】　可能である。

【委　員】　「４０代から５０代」という縛りが不適ということは各委員からの指摘でよくわかった。私が思うに、高齢、若齢かかわらず、例えば地域の老人会などにおいても、あらゆる団体において世代の交代がうまくいっていない。順繰りにうまく担い手がシフトする仕組みを考えることが出来ればよいのではないだろうか。年代を絞るのではなく、各世代間をつなげる仕組みを考えられないだろうか。もちろん４０代と５０代、だけでなく、間を飛ばして４０代と６０代、ということも考え得る。いかに世代を越えてつながっていくか、ということが重要なのではないだろうか。

【委　員】　確かに、例えば市民大学においても担い手の問題はある。５０代半ばを過ぎると、仕事を定年退職した後に何をしたらよいのか、考えている人はいる。昔はそういう人を対象に公民館で講座をやったりしていた。

【委　員】　公民館だよりの編集委員をやっていた時に、団塊世代の方たちが仕事を退職して地域に戻ってきたときにどうやって受け入れるかということを話し合ったことがある。その時も受け皿がなく、難しい問題なのだと感じた。一つの世代をうまく受け入れられても、その次がなぜか続かない。

【委　員】　５０代後半の方達は、やることを探している方が多い。ふじみ野交流セ

ンターに勤務していた時は、５０代後半の方が窓口に来て、団体やサークルの照会をしていくことが多々あった。また窓口に来て、「来年定年退職するが、なにかできることはありますか」と聞いてくれる方もいた。なにかやりたいという思いはあるのだと思う。なにかやりたいのだが、なにをやったらいいのか分からない、というのが現状で、手がかりがつかめていないのではないだろうか。

【委　員】　時間があればなにかやりたい、という世代がいたのは事実。しかし今もまだいるかどうかは分からない。またどのくらいの人がそう考えるのかも分からない。可能な限り仕事を続けたい、という人も多いと思う。

【委　員】　南畑地域では、コロナ禍で今は中止となっているが、毎年お祭りを開催している。そういうお祭りには、若い人も含め、本当に多くの方が参加してくれる。続けていくことは難しいことだとは思うが、みんなが興味を持って「参加したい」と思ってもらえるように工夫を凝らしていければ。

【議　長】　各委員からの意見を聞いて分かったことは、「つながりづくり」ということが、ひとつの焦点になるキーワードだということ。また年代を限定することは分かりにくく、他の世代はどうなのか、と逆に疑問が出てきてしまうので、必要ないということ。「子育て世代」などと括ることもできるが、「世代間のつながりづくり」などとしてもよいのではないかと考える。

【委　員】　「担い手づくり」とまでは言及しないほうがよい。「担い手」と言われると、構えてしまう人もいる。まずは参加してもらって、楽しいと思ってもらうこと、また、これならできそうだな、と感じてもらうことが大切なのでは。

【委　員】　私も同意見。縛られることに怖さを感じるのだと思う。それほどの余裕もなく、いろいろなことに興味を持って手を出したいし、そこになにかしらの強制力が働いてしまうと、一気に気持ちが冷めていく。そういう恐れがあるものには手を出さない。地域には、地域の担い手になるであろう方々はいるわけだが、そういった方々がなにかに興味を持ってかかわったときに、楽しいと思う人が残って続けているのであって、全員が全員継続しているわけではないと思う。やはり、活動する楽しさや魅力、入り口の広さ、「都合がいい時に参加する」ことができるよう、いろいろなところに、さまざまな入口があったらいいのではないかと思う。「もう一回参加してみたい」という思いが続いたときに、「私も関わっていけそうだ」と思ってもらうことができ、担い手の確保ということにつながっていく、次の段階に入るのだと思う。担い手確保を最初から掲げてしまうと、逆に敬遠されてしまい、逆効果になってしまう。

【議　長】　町会活動も同じで、町会長を引き受けるとなると誰しも腰が引けてしまうと思うが、役員として町会活動に参加することはできるという人もいる。まずはハードルを低く設定して、そして参加できる人、世代を増やしていくということが重要なのだと思う。ここまで各委員のお話を伺って見えてきたことは、「世代間のつながりづくり」がキーワードになるということ。この文言はテーマの中に残した方が良いと考える。他に入れ

たほうがいいと思う文言など、なにか意見はあるか。

【委　員】　「異世代のつながりづくり」はどうか。

【議　長】　問題点として、さまざまな地域活動において継続が困難となっている点がある。先日開催された入間地区社会教育協議会でも話題に上ったが、例えば、子ども会育成会を廃止せざるをえない自治体も出てきているとのことだった。生涯学習活動の中から、つながりが徐々に消えていってしまっているということが、大きな問題として存在する。この問題はどのようにしたら解決していけるのか。

【委　員】　事務局に伺いたいが、提言するにあたり、提言書の「柱」は何本設定するものなのか。現状だとテーマ設定が広いので、具体的に提言するとなると何本も柱が立ってしまうと思う。

【事務局】　特に「何本」という指定はない。

【委　員】　提言書は、市民の方に広く読んでいただいて、気づきを得てもらうものなのか。それとも行政が今後の施策の方向性を考えるにあたり参考とするものなのか。

【事務局】　これまでの社会教育委員からの提言書を見ると、後者の色合いが強い。

【議　長】　今日の会議では、テーマとして「世代間のつながり」など方向性を大きく設定して、今後必要が出たら具体性を持たせる、ということで良いのではないかと思う。

【委　員】　様々な話が出たが、市が課題として捉えているキーワードはなにか出たか。

【事務局】　各活動における次期担い手の不足は、大きな課題であると考えている。どうやったら多くの人に興味を持ってもらえるのか。また委員から、コロナ禍になって、子どものために動いてくれる人がいることに気づいた、という話があったが、そういった隠れた人材をどうやったら見つけ出せるのか。

【委　員】　市に対する提言であるから、市が抱える課題に対して提言する、という方法もあると思うし、今後富士見市の社会教育がより良いものとなるよう理想的な形というものを提言するという方法も、またあると思う。今回テーマ案として挙げられた「世代間のつながり」は、全国的な課題であり、富士見市としても解決したい課題であるだろうから前者であろう。

【議　長】　次回に向けての方向性はある程度見えてきたのではないかと思う。ではここで、事務局から資料の説明の続きをお願いしたい。

【事務局】　資料に基づき説明。

【議　長】　事務局からの説明を踏まえ、次回の会議までに各委員に考えてきていただきたいことを「宿題」として示した。正解があるようなものではなく、様々な場所で、様々な経験をしてこられた各委員の考えを伺い、委員間で共有するためのもの。教科書などに載っているような答えではなく、ぜひご自身の経験から導き出されるお考えを示していただきたい。

【委　員】　「生涯学習」という言葉が出てきたときに、仲間内で話し合いをした。最終的に「社会教育」という言葉をなくしてはならないという結論に至ったと記憶している。当時は「生涯学習」と「社会教育」と、別のものとして分けて考えており、社会教育課がなくなり生涯学習課になったと

きも、その変化をどのように捉えたらよいか迷った。しかし今は融合してしまっているのかもしれない。「社会教育」という言葉自体が薄れてきてしまっているようにも感じる。

【委　員】　生涯学習課が教育委員会にあるが、市長部局の地域文化振興課でも、生涯学習という言葉を使っていた。生涯学習を所管する課が二つあり、混乱している。今まで教育委員会で社会教育として扱ってきたことが、途中から地域文化振興課の方に生涯学習の内容が移っていってしまったのか。私自身整理が追い付いていない。また、公民館は教育委員会だが、交流センターは市長部局。しかし公民館も交流センターも、やっていることは大差ない。そこも疑問に思っている。

【議　長】　疑問に思っている点、自分の中で整理できない点を書いていただいても構わない。それを委員間で共有し、考える機会にできれば。

３．その他

【委　員】　議長からも話があったが、１０月に行われた社会教育委員研修会の反省会が、先日開催された入間地区社会教育協議会社会教育委員部会にて行われた。富士見市は社会教育委員だけでなく、公民館運営審議会委員にも多く参加していただき、他の市にはないことだとお褒めの言葉があった。また２月に入間地区生涯学習フォーラムが開催される。詳細については事務局よりまた連絡があると思うが、テーマは「コロナとの戦い」。興味があればぜひ参加してみてほしい。

４．閉　会

次回会議日程

第４回会議

日程：令和４年１月３１日（月）午後７時～

場所：中央図書館　視聴覚ホール